2020年度入門講座2020/12/

**第二十四課　聖母マリア**

**Ⅰ　教会の中でのマリア**

　　カトリック教会では、伝統的に聖母マリアに対する特別の尊敬と愛をもっている。

　　マリアはイエスの最も近くにいて、神の子らの家族（教会）の中で、母親のような役割を果たす方だからである。キリスト者は、初代教会のころから、おとめマリアを「神の母」と呼ぶことに親しんできた。公会議(エフェゾ４３１年)は、おとめマリアが「神の母」であるという教義を信仰の不可欠な要素として定めた。

多くの芸術家がマリアをテーマに優れた音楽や絵画の傑作を遺している。このことは、マリアを女神としてたたえることではない。マリアを普通の女性としてしか見ないプロテスタント教会と話し合うとき問題になる。プロテスタントの教会は、福音の源泉に帰るということに重きを置いて聖書を非常に大事にし、伝統の中で出来上がってきた様々な信心を取り上げなかった。

**Ⅱ　信仰の旅路を歩んだマリア**

マリアは、羊の群れの番をしたり、泉に水を汲みに行ったり、人々を訪問したり、借り入れの人たちの後ろで落穂ひろいをしたり、すべての若い女性と同じように自由であっただろう。

　　しかし、マリアの一生は、イエスゆえに平坦ではなかった。一生を通じて自分に理解できなかったことが多かったマリアはひたすら神のみ心が行われることを望み、ただ神を信じ抜いた。聖書にマリアに関する記述は少ないが、彼女の生涯のいくつかの重要な場面を眺め、神がどのようにイエスの母マリアを準備されたかを黙想することができる。

1. 救いの計画におけるマリアの役割

「マリアがキリストの秘儀に決定的に登場することになったのは、天使のお告げというあの出来事によってである。」(ヨハネパウロⅡ世の回勅『救い主の母』)

マリアは信仰によって天使の言葉を受け入れ、従順に身を捧げることによって、神の母になるということを受諾した。

２．マリアの人柄と役目

イエスの誕生の予告　ルカ1：26－38

マリアの受胎告知となった舞台ナザレ

ローマ直轄領土であったイスラエルは、ローマ帝国の軍事支配に対する抵抗運動

で揺れた時代であった。中でもナザレは、独立を目指す民衆が武力で鎮圧された町。この武力蜂起の連鎖の中で、社会的・政治的困難に直面していたユダヤ人は、重税に苦しみ、貧困と抑圧・差別に苦しみ、救い主の登場を待望していた。

イエスの生まれた時代はローマ帝国に対する反乱戦争で揺れた時代。マリアへの受胎告知となったナザレは、苦しく陰惨な記憶を持った村。ローマによる軍事支配―憎悪―抵抗運動―武力鎮圧という暴力の連鎖

「ガビニウスの大虐殺」（BC57）

一万人の捕虜とされたガリラヤ人がナザレ近郊のタボル山のふもとで虐殺された。

「セフォリスの破壊」（BC4）

ヘロデ王没、反ローマ反乱。拠点となったセフォリス焼き払われる。

2千人エルサレム近郊で十字架刑。ナザレから多くの義勇軍戦死。

イエスは父ヨセフとこのセフォリスに行き、再建の仕事に従事したろうと言われてい

る。イエスは様々な悲しい出来事を聞いておられた。

**a「恵まれた者」**（「女のうちで祝福された方」）という表現の意味。

天使とエリザベトの挨拶が示しているのは、マリアが「神の母」として選ばれ、マリアの魂にあらゆる恵みの栄光が見られたということである。

神は選ばれた人たちに、神の愛の格別の賜物である「恵み」によっていのちと聖性をお与えになる。こうして**すべての人**が「あらゆる霊的祝福をもって祝福され」、「イエス・キリストを通して、御自分の子」となることが成就達成される。

**b「お言葉通り、この身に成りますように」**

マリアの「なりますように（「Fiat」「let It be」）」という受諾が、神の救いの業を人間の世界で成就させることになった。マリアは人祖の罪によって断たれた神との関係を回復し、神と人間との間に和解をもたらす役割に与るものとなる。

全人間を罪と破滅に導いたエバに対し、全人類に救いをもたらしたマリアは

「第二のエバ」と呼ばれる。そこから、マリアは「いのちあるものの母」であるとする見解がうまれ、原始教会から続いている基本的な教義とされている。

＊一人の女性を経て死が入ってきたように、いのちが一人の女性から生まれて、われわれのものとなったことは深遠な神秘である。

天使のお告げを受けたマリアは、ことの重大さを感じ、戸惑い熟考しただろう。しかし、神への絶対的信頼とあふれるばかりの愛を感じて、「はい」とこたえた。この承諾によって神の計画がすべて実現していくことになる。イエスの母となることを承諾したマリアの中で、神と人が直接触れることになった。

マリアが後にキリストと共に苦しまれる体験の時のように、人類の救い主に親密に寄り添うことはやさしい道ではない。十字架という究極のシーンでマリアとイエスが出会う。

**３．エリザベット訪問**　ルカ1：39－56

天使から「あなたの親戚のエリザベトも年を取っているが、男の子を身ごもっている」と聞いたマリアは、“急いで”出発する。

不思議な体験をした二人の女性の出会い。

a　エリザベットの挨拶（41－45）

「あなたは女のうちで祝福された方、あなたの胎内の子も祝福されています」

　　　　この感嘆の叫びが、「アベ　マリア」の祈りの一部に加えられ、教会が最も頻繁

に捧げる祈りの一つになっている。

「わが主の母がわたしのところにおいでくださるとはいったいどうしたことでしょう」

　　　　　上の２文、マリアが主(メシア)の母であることの証言。胎内の子もこの証言に加

わる。

　「主から告げられたことが成就すると信じた方は本当にお幸せなことです」

お告げの場面の「恵まれた者」と対比。マリアの本質を表すことばである。

マリアに関する事実の核心は、マリアが「信じた」ことにある。マリアの「神への旅」信仰の旅路の出発点となる。アブラハムの信仰は旧約の出発点であり、マリアの信仰は新約の出発点。

b　マリアの賛歌（46－55）

　　「今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな人と言うでしょう。力ある方がわ

たしに偉大なことをなさいましたから。」

自分の弱さ小ささの中に働かれる神の偉大さを分かること、これこそ真の謙遜。

**４．「マリアの無原罪の宿り」**とは

「神は、神の子イエスの母となるように選んだマリアを、罪の状態に置いておかれるはずはない。マリアを、一瞬たりとも罪の支配のもとに置かず、罪に束縛されない女性として、神は先に彼女に恵みを与えられた」という伝統が、早くから教会の中にあった。１８５４年、教会は、このマリアの特別な恵みを、神学的に「無原罪の宿り」と表現し、大切な教義とした。祝日は１２月８日である。

(２年後、ルルドでベルナデッタに出現「原罪なく宿りし者」)

　　人祖アダムとエバが創造されたとき彼らが内的恩恵の状態にあった。そうであれば、「第二のエバ」であるマリアが、この内的賜物を得て誕生されたことを否定することはできない。

**５．「マリアの被昇天」**とは　　（1950年制定）

文字通り、マリアが天に挙げられたこと、すなわち、イエスの死と復活を通して約束された永遠のいのちの栄光に参与されたことを示す。マリアが人間として最初に参与させられた人。

これはわたし達一人ひとりの終末的な完成を表すものである。マリアの歩まれた道は、わたし達の歩むべき道、すなわち謙遜に奉仕と愛を生きる道を示している。

* 1. マリアはわたし達のために常に祈ってくださるかた。
	2. マリアはわたし達に助けの手を差し伸べてくださるかた。
	3. 神の愛の完全な模範として導いてくださるかた。

６.　聖母マリアに対する敬いと愛

聖マリアに対する信心は、父と子と聖霊に対する信仰とは本質的に違う。マリアは神ではない。神の母として選ばれ、神の恩恵に対して完全に答えられたマリアを、人間の中で最も優れた方として崇敬するのである。

誇張されたマリア信心にならないように、マリアの神への信仰、希望、愛の態度に倣

いながら、キリストの救いのわざを生きるよう努める。教会の伝統的な聖母信心、典

礼や祈り、行事は、聖書の教えと結ばれている。わたし達も教会の信心を基準として

行うこと。教会の主流からそれる、独りよがりの信心にならないよう、また「不思議

な出来事」と結び付けようとする傾向に警戒が必要である。